

内と外から見た自然保護協会

斉藤 禎 男

さいとう・さだお
1936年函館市生まれ。
明治大学文学部卒業。
1959年から93年まで北海道タイムズ記者。ひぐまの会副会長。主な著書『言論の精神』（北海道タイムズ社）『ヒグマ』上下巻（思索社）

昭和三十年代半ばは、北海道の自然をめぐる協会運動の草々期に当たります。時の配材で、昭和三四年、地元の新聞記者になった私にとって逃げ難いテーマになってゆく。

しかし、草々期の面白さで、折々の談論風発が楽しかった。状況が変わって、したがって、自然保護協会のあり様にも大きな変化が認められるようになって、時代のはざまの躍動感が教えてくれた事柄が、四半世紀の記者生活の背景になっている。

協会が、理事の直接選挙導入へと動ききっかけになる大雪山縦貫道路。その予定コース現地調査は、青い空に恵まれ、長い溜沢を下りたあとキャンプ地でのコーヒーマは、おいしかった。

調査チームには、調査を監視するとかの面白い若者たちが同行していた。行程中、チームに迷惑をかけるのだが、山行が終わって最終の美瑛温泉につくや態度が変わり、体制批判統出といった光景となる。

現地調査の翌年三月、協会のいわば出直し初理事会が開かれる。昭和四十年代後半のこの時期は、若者たちの都市へ流出現象が社会問題となって、地元町村では、若者の引き止め策としてポウリング場建設を急いでいた。

真面目にポウリング場を議論、建設した。縦貫道路ができて僅か四キロしか道路が縮らないとの説得も若者流出の危機感には多くの効果は持たなかった。

それは都市とムラの戦いのようだった。

「われわれの町村じゃ、自然保護が老人福祉などからんでくる。福祉対策がいくらかでも良くなるなら、道路一本つけたっていいじゃないか。

樹木を少しくらい切っても、がまんしようということになる。実は、これが北海道の自然を破壊してきた。生活環境が予想外に悪化して、とどのつまりはどこにもすがりつくことが出来なくなつて、自然保護協会に駆け込んでくる」

出直し自然保護協会の初理事会で斜里の午来晶さんは「意識をどう耕すか、正面から取り組んでほしい」と訴えた。民選で初めて理事の肩書きを持つことになった午来さんの言葉に当時の協会の置かれていた社会的ステータスといったものが読みとれる。

具体的には社会からの信頼感であり、協会を構成していた指導者群への信頼感でもあった。しかし、午来さんがあの理事会で突きつけた「意識をどう耕すか」というテーマは、いままって決め手がない。

意識が個人に帰属するからである。

理事の直接選挙は、やがて一般選挙に類似した票集め現象も一部生んでゆくが、長くは続かなかつた。記者たちの業界用語に廊下トンビというのがあつた。職業柄やむを得ないことなのだが、理事の直接選挙が始まって、それまでになかった現象が起き始める

記者は渦中に巻き込まれる。

A教授からB先生の陰口を聞き、改めて今度はB先生からA教授の非力、できの悪さを嘆かれる。双方を呑みこんで、いま何がどの方向へ進んでいるのか、退いているのかを確めるのが記者商売なのである。

多くの先生たちは、抑制された文章を書かれる人柄だったので、いちいちの証言は残されていない

い。しかし、渦中にいた記者にとっては、男たちの器を見分けるよい機会だった。

文章は腐食が早いことを忘れてはいけない。時世時節なのである。何でも書けばいいってものではない。たくさん文章が残っていることが、正しいことの証明でもない。

私たち新聞記者は、多くこのように教えられた。清水幾太郎さんはジャーナリズムについてこう書いた。

「私の文章は、流れて行く時間の歯車と噛み合ったものである。噛み合うことが文章の生命である。しかし、時間が更に流れて、大小の事件が忘れられて行くに従って、これらの事件を扱った私の文章の短い生命も終わる。…それは瞬く間に腐食する」

そして私が書いた記事も多くが腐食した。

唐突ながらこの国は、まだ法令の文化を引きずっている。公は私に優先する。公法の社会である。

自然保護協会をつくろう。こんな話になったのは恐らく先生たちの雑談、言葉を改めれば談論風発の結果ではなかったかと思っている。初代の会長に林常夫さんが推されるのも、事柄の順序といえた。

中根千枝さんの言葉を借用すれば、それはこのタテ社会の基本システムのひとつ、序列の認識だろう。ある会合があって、自分の座わる席次がだんだん判って来るシステム。

律令社会の、それが默契である。自分の席次を間違うとはじかれる。

山の個性に応じた森林施業プランなどで北海道開発功労賞を林常夫さんがうけるのは昭和四十六年である。道では、功労を紹介した記念誌をつくっ

てくれる。受賞者に執筆者を選択させる仕組みである。

林常夫さんの紹介文章は、私が受けた。林業会館(当時)の道庁前庭を見下せる林さんの事務所に通うことになる。

風の学者と形容された。明治末期に始まるタンニン生産の影響を受け、枯死していった十勝平野のカシワ樹海。その後の風害を防止するため十勝平野に防風林づくりを進めたのも林常夫さんである。

北海道に初めて国立公園が誕生する頃の話も聞いた。自然保護などという言葉のなかった時代。館脇操さんは、のちに「運よく阿寒国立公園の開幕に当たり、北海道林業界の元老、林常夫氏の好意で私は縦横に阿寒国立公園を歩いた」と書くが、この時代、林常夫さんによると、

「風景論をぶっても左派扱いを受けた」そんな時代もあったことを教えられた。

自然保護協会の草々期に主役を演じる男たちの多くは、既に鬼籍におられる。林常夫、館脇操、犬飼哲夫、今井道夫、東條猛猪といった人たちである。そして昭和三四年は町村金五さんの道政が始まる年である。

共通していたのは、器の大きさだった。天与の才と自助努力を怠らぬ男たちといえた。だから大雪山ロープウェイ、縦貫道路、札幌オリンピックの恵庭岳滑降コースなど諸問題があっても、この人たちは深刻がらなかつた。深刻さは事柄を解決しないと承知しているようだった。深刻さは相手に深手を負わせる。ついでながら自然観といったものは、その人の

育ち、学習といった営為がだんだん積みあげてゆくもので、したがって職業とはいささかも関係がないのではないか。経済の東條さん、政治の町村さんと接して、そんな思いにかられた。

平成元年の北海道開発功労賞を受ける斉藤春雄さんの記念誌を書くため、改めて斉藤さんのお宅に取材に幾度か訪れ、町村さんの北海道への規模雄大な思いやりを斉藤さんの話を通じて知ることになる。

ところで最近、上山春平さんがビジネスマンのために書いた日本史を読んで、ハタと気付くことがあった。

いま都市化が見直されるなかで、自然保護の観点から天台、真言宗といった密教の《行》が理解され始めている。そういうカルチャーが少しずつ生まれている。人の魂を浄化するためのメソッドロジー、つまり方法論として見直されてくるんじゃないか。

とまあ、上山春平さんの話とは、こんな内容なのでした。

道庁を主力部隊として官僚指導の北海道山岳会が創設されるのは、北大山岳部より三年ばかり早が大正一二年。会長が宮尾舜治長官、そして専務が林常夫さんである。林務官が山屋であることに間違いない。あろうはずもなかった。取材の際、実は林常夫さんも宗教をいわれた。

しかも上山春平さんが書かれた天台宗のことである。

楨有恒さんがスイスの山を登っているのを見ていた英国人が、日本人の山登りには、アルピニズムのほかに、なにか違ったもの、特別なものがあるのではないかと感じた。楨さんがその後、英国

を訪問した際、その質問を受ける。この時に植さんが引き合いに出したのが『六根清浄スピリット』だった。

改めて書けば、六根とは眼・耳・鼻・舌・身・意に生じる罪障のことで、六根清浄は、天台宗の『行』の唱え言葉である。

林常夫さんは、楨有恒さんのエピソードを紹介しながら、六根清浄を忘れた日本人の山登りを批判した。

さて、いつの頃からか、この国の自然保護運動に、対立することを自己目的化する運動律が持ち込まれる。それは、この国の政治運動の原理のようなものである。

だんだんにできあがる運動律ゆえに、発表を読むような明確さはないが、北海道は昭和五〇年代の前半に既に定着してしまっていたのではないか。西暦では一九七〇年代半ばになる。この時期は、自動延長された日米安全保障条約が、外交史上、定着した時期に相当する。

それはアカデミズムの不寛容の精神と類似の運動律といえた。サロン風の寛容は否定されてゆく。また、この国の原理でもある律令文化に代わって、欧米亜流の個人の権利を背景とした私法の精神の侵入とも映った。

ところで、北海道の自然をめぐる情報提供者として道林務部の存在があった。林政課スタッフを中心とした林務部報『林』は、私たち新聞記者のいわば必読雑誌であった。

そんな時代の話である。

山の道具屋、秀岳荘の金井五郎さんが私家版随筆集『山の素描』の発行を始める。昭和三十七年春

であった。編集人が『林』と同じ山口透さんで、一人に一回しか書かせない、頑固な方針を貫いた。昭和五一年一二月に休刊号をだして発行を終わる。

林務部報『林』の創刊は早く、昭和二十七年だが、自然保護協会『会誌』創刊は『山の素描』のあと昭和四一年に入ってからである。

私にとっても記者として生きてきた証であり、この三つは、いずれも製本をして持っている。布張りハードカバーの『山の素描』全一卷。自然保護協会『会誌』は、レザー張りハードカバー全二巻。そして『林』は、山特集だけを集めた全五巻である。そして三つともに編集人が山口透さんなのだ。

実は『林』も『会誌』も発行は続いている。しかし私は保存するのを止めている。はっきりいってしまえば、面白くなくなった。合本して書架に飾る気分がしなくなった。それが動機らしい。

保存を中止した年代を調べてみたら、いずれも昭和五〇年代前半、『会誌』が昭和五二年度版、『林、山特集』が翌年だった。

この時期、北海道の山、あるいは自然にかかわる人たちのなかで何かが起きていた。

秀岳荘の金井さんが、北大山岳部の学生たちにツケ売りを中止したのは『山の素描』休刊の数年前のことだった。学生が変わってしまったからだ、と金井さんからうかがった。

私に象徴的だったのは、京大名誉教授・大槻正男さんの他界を報じる新聞記事だった。

大槻さんは、和辻哲郎さんに『風土』を書く動機をくれた先生である。大陸を遠望する地中海の船上で「ヨーロッパに雑草はありません」と教え

てくれた先生なのである。『風土』に和辻さんが書いておられる。

ところが、その大槻さんの訃報に、どの新聞を調べても、このことに一言も触れていないのである。

『風土』を読まぬ新聞記者はいないだろうと思うが、記者も変わってしまった。というより時代の風がかわってしまったという印象だった。それは昭和五五年でした。

ジャーナリズムの文章は腐食すると書いた。記者が書いても大学の先生が書いても腐るのです。しかも大小の事柄が忘れられるテンポが早くなるのに比例して、腐食も早くなる。

言葉の生成流転。従前、プロブレんで適用していた公害の問題という用語もイッシュューに変わった。英語表記のプロブレンは公害問題を意味しなくなっただけです。しかし、イッシュューは面白い。英語圏の賢い選択といえる。

Time's issue of January 3.

これは、一月三日付のタイム誌が提供する問題点といったほどの意味で、どっちが正しい、は前提としない。一致しない、係争中の事柄ということでしょう。

無主の環境をめぐる、どっちが正しいかを争うのは賢くありません。

さて、大雪縦貫道路の次は、表大雪循環観光産業道路でした。民選によって会長に選ばれた伊藤秀五郎さんの理事会は、道企業局から打診のあった表大雪循環道路の調査を断った場合の影響について話し合うことになる。当時の協会は、北海道のトップ・リーダーでした。他をもって代え難い

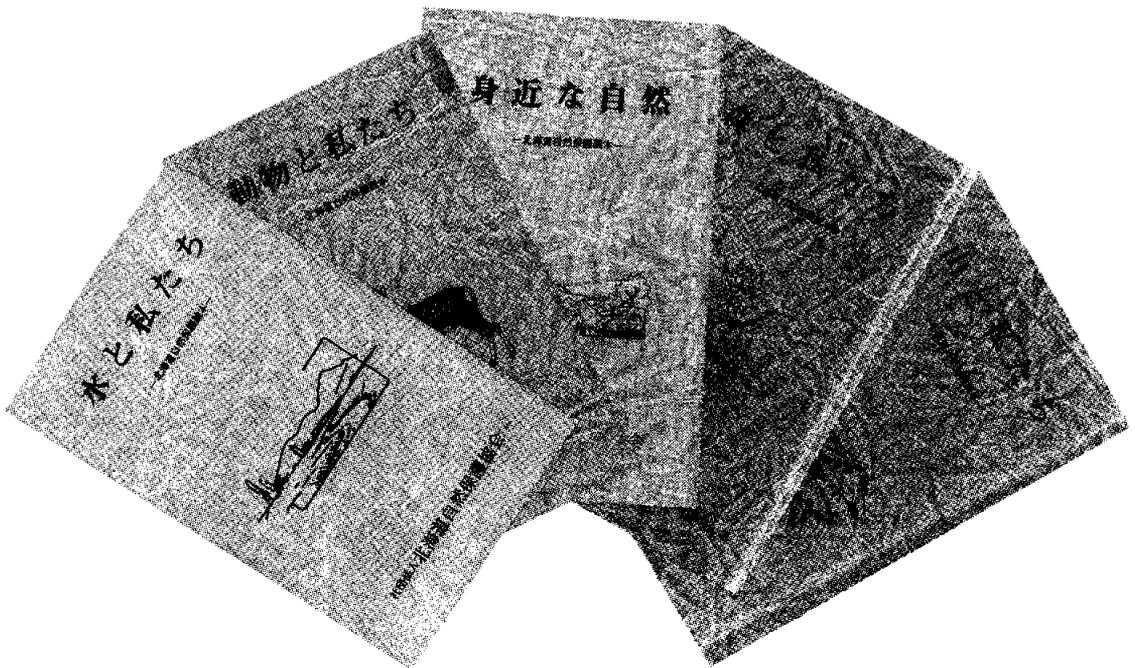
頭脳集団でしたから、断れば調査依頼は、他のコンサルタント会社へゆく。その場合の心配だった。大雪山をめぐるこの二つのテーマは、自然保護協会に与えられた天命だったように思う。豊かさの指標としての山岳道路を諸兄はどう思うのか考えなさい、とでもいつてるようだった。

この時期、西村格さんを世話人とした大雪山の自然を守る会、札幌オリンピックを控えて札幌周辺保護緑化懇話会ができる。協会運動の、いわば孫生といった運動だった。その懇話会は会長が今田敬一、議長が安倍三史さんだった。

みなさんが、抑制された挙借言辞で知られていただけに、時の荒っぽさは説得力をもった。

大雪山の二つの山岳道路の中止は、運動のトップ・リーダーたちと官僚、もう一ついわせていただければ新聞記者たちの信頼関係の結実だったと思う。市民運動は、世間の信頼を得て初めて成り立つ。

ところで談論風発だが、当時、協会事務局のあった植物園事務所、使う自然と残す自然を地図に落とせないか、と話になった。それが平成元年策定の北海道自然環境保全指針に生きたのは楽しいことだった。あれから二十年たっている。



自然保護協会の出版物『山と私たち』他。
『水と私たち』『身近な自然』は余部があります。一冊500円
希望者は協会事務局へ申し込んでください。